

研究ノート

大学生の学生生活自己評価と大学への 評価を規定する要因の分析¹

山 本 功

1. 本稿の目的

本稿はふたつの目的を掲げる。第1に、大学生の学生生活の自己評価を規定する要因を探索的にではあるが明らかにすることである。第2に、大学生による大学への全般的評価を規定する要因を探ることである。両者は、概念的には別のことではあるが、関連していることが予想される。一方の高い評価は他方を高く評価させることが予想されるし、またその逆も予想される。どちらからアプローチするにせよ、一方の評価を好転させる介入は、他方をも好転させることが期待される。

2. 使用するデータについて

「第4回淑徳大学学生生活実態調査」のデータのうち、総合福祉学部の学生のデータのみを使用する。同調査は2005年11月に実施された悉皆調査である。1年生は基礎演習、2年生は英語授業、3・4年生は演習等を通じて調査票を配布し、回収は封筒に厳封して行われた。総合福祉学部における有効回答者数は1,724人であり、回収率57.1%であった。

調査報告書として『第4回淑徳大学学生生活実態調査報告書』が刊行されており、基礎的集計と分析は同報告書を参照されたい。

なお、本調査は悉皆調査であり、統計的検定という概念は不要ではあるが、便宜的に提示する。

3. 分 析

第1に学生生活の自己評価と大学への全般的評価との関連をみる。第2に学生生活の自己評価を規定する要因の分析を行い、第3に大学への全般的評価を規定する要因の分析を行う。

3-1 学生生活自己評価と大学評価の関係

まず、学生生活の自己評価の結果を以下に示す。「あなたは、全体的に自分の学生生活をどう評価していますか」とたずねた結果であり、回答は4件法でえた。

「とても満足している」13.8% (236人), 「どちらかという満足している」61.0% (1,041人), 「どちらかという不満である」20.2% (345人), 「とても不満である」4.9% (84人) である。

この学生生活自己評価と、大学への評価とのクロス集計結果を表1-1に示した。なお、大学への評価は「あなたは、全体的に、淑徳大学をどう評価していますか」とたずね、4件法で回答をえた。

表1 学生生活自己評価と大学評価の関係

(%)

		大 学 の 全 体 的 評 価				合 計	人 数
		とても満足	どちらかという満足	どちらかという不満	とても不満		
自 学 己 生 評 生 価 活	とても満足	34.8	59.0	4.4	1.8	100.0	227
	どちらかという満足	4.0	74.2	20.2	1.6	100.0	984
	どちらかという不満	1.2	25.8	65.3	7.6	100.0	329
	とても不満	1.3	6.3	33.8	58.8	100.0	80
	全体	7.6	58.9	27.8	5.7	100.0	1,620

$p < .001$ (ただし、1セルが期待度数5未満)

表1から、学生生活の自己評価と大学への評価は正の関係にあることが見てとれる。自己評価が高い者は大学への評価も高く、その逆も言える。自らの学生生活に「とても満足」している者は34.8%が大学をとても高く評価しており、自己評価が「とても不満」である者は58.8%が大学に対して「とても不満」であるとしている。

自己評価が大学の評価を高めるのか、大学への評価が自己評価を高めるのか、あるいは相互作用があるのか、このデータから両者の因果関係を特定することはできない。だが、大学生生活の自己評価を高める施策は、大学への評価を高める方向で作用しそうであると言える。よって、以下では大学生生活の自己評価を規定する要因を探索的に分析していく。

3-2 学生生活自己評価を規定する要因の分析

(1) 性 別

表2は、性別にみた自己評価である。「とても満足」という回答は男子が女子よりも3ポイント高いが、「どちらかという満足」という回答で男子は女子よりも7.4ポイント低く

なっている。また、「とても不満」とする回答は男子が4.3ポイント高い。この結果をみると、わずかではあるが、男子は女子に比べ自己評価の高い層と低い層に分化する傾向にある。とはいえ、明瞭な男女差があるというほどではないだろう。

表2 性別の学生生活自己評価

(%)

	とても満足	どちらかという と満足	どちらかという と不満	とても不満	合 計	人 数
男	15.8	56.2	20.2	7.7	100.0	594
女	12.8	63.6	20.2	3.4	100.0	1,112

$p < .001$

(2) 学 年

表3は、学年別に集計した結果である。「とても満足」「どちらかという満足」のどちらの回答も、2年生において落ち込み、3年生以降で回復する傾向にあることがわかる。

表3 学年別の学生生活自己評価

(%)

	とても満足	どちらかという と満足	どちらかという と不満	とても不満	合 計	人 数
1年生	13.4	61.8	20.0	4.7	100.0	529
2年生	10.3	57.9	25.9	5.9	100.0	406
3年生	15.2	63.8	16.4	4.5	100.0	420
4年生	16.7	60.2	18.4	4.6	100.0	347

$p < .05$

以下は、「とても満足」と「どちらかという満足」を統合して「満足」群とし、「どちらかといえば不満」と「とても不満」を統合して「不満」群として分析していく。

(3) 入学時における志望順位

表4は、入学時における志望順位別に集計した結果である。志望順位が下がるほど、満足群が少なくなっていることがわかる。

表4 入学時における志望順位別の自己評価

(%)

	満 足	不 満	合 計	人 数
第1志望	79.0	21.0	100.0	993
第2志望	72.1	27.9	100.0	233
第3志望以下	68.0	32.0	100.0	472

$p < .001$

(4) サークル加入

表5は、サークル加入の有無別に集計した結果である。サークル加入群の方が満足群が多くなっていることがわかる。

表5 サークル加入の有無別の自己評価

				(%)
	満 足	不 満	合 計	人 数
加 入	81.0	19.0	100.0	1,138
未加入	62.5	37.5	100.0	568

$p < .001$

(5) 学業適応状況

授業態度をたずねる設問が10項目あった。これらを利用して、学業への不適応度を測定する「学業不適応尺度」を構成する。

項目は、以下の通りである。「授業中に私語をしてしまう」「授業中に携帯電話をいじる」「授業中に無断で教室をぬけだしてしまう」「授業をよく欠席する」「授業によく遅刻する」。以上の5項目については、「とてもあてはまる」に3点、「ややあてはまる」に2点、「あまりあてはまらない」に1点、「全然あてはまらない」に0点を与える。

「授業中、ノートをきちんととる」「わからないことは先生に質問する」「先生の話しはよく聞いている」「提出物のしめきりはきちんと守る」「大学の成績はよい方だと思う」。以上の5項目に関しては、「とてもあてはまる」に0点、「ややあてはまる」に1点、「あまりあてはまらない」に2点、「全然あてはまらない」に3点を与える。

以上10項目の信頼性係数は $\alpha = .76$ ($n = 1,707$) となった。内的一貫性があると判断できる。10項目の総和を算出する。理論値では最小値0、最大値30で、得点が高いほど学業不適応度が高いことを意味する。

その結果、以下のようになった。平均値12.25 ($n = 1,707$)、最小値0、最大値30、標準偏差4.68、歪度0.34、尖度0.30。

学生生活自己評価の「満足」群 ($n = 1,268$) の平均値は11.87、標準偏差4.43、「不満足」群 ($n = 421$) の平均値は13.45、標準偏差5.10となった。これら2群を独立変数とした平均の差の検定を行った結果、 $t(643) = 5.68$, $p < .001$ で有意な差がみられた。

すなわち、学生生活の自己評価で「不満足」である群は、学業への適応状況がよくない傾向にある。

ただし、学生生活自己評価4件法（とても満足 = 1～とても不満 = 4）と上記の学業不適応尺度の相関係数は $r = 0.14$ ($n = 1,689$)、 $p < .001$ であり、明確な相関関係があるとはいえない。学業への適応状況が学生生活自己評価を決定的に規定するというわけではない、とい

うことである。

(6) 学内友人関係

大学内での友人関係の形成についてたずねる設問が5項目あった。「大学で新しい友人がたくさんできた」「基礎演習（学問の基礎）で新しい友人ができた」「サークルで新しい友人ができた」「入学前からの友人が大学にいる」「大学内に、悩み事を相談できる友人がいる」である。これら5項目の信頼性係数は $\alpha = .61$ ($n = 1,712$) であった。「入学前からの友人が大学にいる」という項目は他の項目との相関が低く、これを除去すると $\alpha = .68$ ($n = 1,712$) まで上昇することがわかった。そこで、これを除去した4項目を利用して友人関係不適応尺度を構成する。

「とてもあてはまる」に0点、「ややあてはまる」に1点、「あまりあてはまらない」に2点、「全然あてはまらない」に3点を与え、総和を算出する。理論値では最小値0，最大値12点で、得点が低いほど友人関係の形成度合いが高いことを意味する。

その結果、以下のようになった。最小値0，最大値12，平均値3.22，標準偏差2.72，歪度-0.74，尖度0.08。

学生生活自己評価の「満足」群 ($n = 1,267$) の平均値は2.72，標準偏差2.44，「不満足」群 ($n = 427$) の平均値は4.60，標準偏差3.00となった。これら2群を独立変数とした平均の差の検定を行った結果， $t(626) = 11.71$ ， $p < .001$ で有意な差がみられた。

すなわち，学生生活の自己評価で「不満足」である群は，友人関係の形成度合いが低く，不適応傾向にあるということである。

学生生活自己評価4件法（とても満足 = 1～とても不満 = 4）と上記の学業不適応尺度の相関係数は $r = 0.36$ ($n = 1,694$)， $p < .001$ であり，正の相関関係にある。すなわち，友人関係の形成度合いが学生生活自己評価を一定程度規定しているということが言える。

(7) ロジスティック回帰分析による学生生活自己評価を規定する要因の分析

以上検討した6つの要因のうち，性別は明瞭な違いはみられず，学年は学生生活自己評価と直線関係にはなく，回帰分析には不適切であることがわかっている。そこで，残り4つの要因を独立変数とし，学生生活自己評価を「満足」群，「不満足」に2値化したものを従属変数としたロジスティック回帰分析を行い，それぞれの要因が独立してどれほど自己評価に影響を与えているのかを検討した。

入学時点の志望順位は2値とし，1位を0，2位以下を1とした。サークル加入の有無は加入を0，未加入を1とした。学業不適応尺度と友人関係不適応尺度は標準化したZ得点を投入した。結果を表6に示した。

結果として、すべての独立変数が有意に学生生活自己評価に影響を及ぼしていた。入学時点における志望順位が第2位以下であると、他の要因を統制したうえで自らの学生生活を「不満」と評価する確率が1.64倍となっている。以下同様に、サークルに未加入であると1.37倍となっている。学業不適応度が1標準偏差上昇すると、1.59倍となる。友人関係不適応度は1.98倍となっている。

表6 ロジスティック回帰分析による学生生活自己評価を規定する要因 (n=1,670)

	B	標準誤差	Wald	有意確率	Exp (B)
志望順位 2 位以下 (=1)	0.50	0.12	16.47	0.000	1.64
サークル未加入 (=1)	0.32	0.15	4.65	0.031	1.37
学業不適応のZ得点	0.46	0.06	55.55	0.000	1.59
友人関係不適応のZ得点	0.68	0.07	88.62	0.000	1.98
定数	-1.59	0.10	239.54	0.000	0.20

- 2 対数尤度1645.20 Cox & Snell $R^2=0.13$ Nagelkerke $R^2=0.19$

Hosmer と Lemeshow の検定 $p=0.282$

(8) 学年別の分析

前項における分析は学年を統制していなかった。しかしながら、学年が異なれば同じ要因でもそのもつ意味合いが異なる、ということは十分考えられる。例えば、サークルに加入していることの意味合いは1年生と4年生では異なるであろう。そこで、学年別に前項と同様の分析を行った。その結果を、表7に示した。

入学時の志望順位が第2位以下であることのもつ効果は1年生で1.88倍、2年生で2.18倍と、むしろ2年生時点で上昇することがわかる。1, 2年生とも有意な効果である。3年生では1.32倍、4年生で1.44倍とその効果は3年次以降薄くなっていき、しかも有意ではなくなる。

サークルに加入していないことの効果は4学年すべてにおいて有意ではないが、2年生においてのみ傾向差はある。1年生時点では1.47倍、2年生で1.74倍と2年生時点で効果が最大になり、3年生以上では説明力を失っていく。

学業不適応はすべての学年において有意である。1年生で1.94倍、2年生で1.47倍、3年生で1.44倍、4年生で1.54倍である。一単位上がるとこれだけオッズ比が上がるということである。一定の効果があるとみるべきであろう。

友人関係不適応度は、すべての学年で有意であり、学年をとおして安定した効果がみられる。1年生では1.92倍、2年生で1.74倍、3年生で2.02倍、4年生で2.39倍となっている。

表7 学年別のロジスティック回帰分析

学 年		B	標準誤差	Wald	有意確率	Exp (B)
1 年生 (n = 521)	志望順位 2 位以下 (=1)	0.63	0.23	7.44	0.006	1.88
	サークル未加入 (=1)	0.39	0.28	1.93	0.165	1.47
	学業不適応の Z 得点	0.67	0.12	32.13	0.000	1.94
	友人関係不適応の Z 得点	0.65	0.14	23.07	0.000	1.92
	定数	-1.64	0.18	85.56	0.000	0.19
2 年生 (n = 396)	志望順位 2 位以下 (=1)	0.78	0.24	10.98	0.001	2.18
	サークル未加入 (=1)	0.55	0.29	3.63	0.057	1.74
	学業不適応の Z 得点	0.39	0.12	10.29	0.001	1.47
	友人関係不適応の Z 得点	0.56	0.14	15.32	0.000	1.74
	定数	-1.41	0.20	51.86	0.000	0.24
3 年生 (n = 412)	志望順位 2 位以下 (=1)	0.28	0.26	1.15	0.284	1.32
	サークル未加入 (=1)	0.24	0.31	0.60	0.438	1.28
	学業不適応の Z 得点	0.37	0.13	7.73	0.005	1.44
	友人関係不適応の Z 得点	0.70	0.15	23.03	0.000	2.02
	定数	-1.73	0.22	59.39	0.000	0.18
4 年生 (n = 337)	志望順位 2 位以下 (=1)	0.36	0.28	1.68	0.196	1.44
	サークル未加入 (=1)	0.01	0.33	0.00	0.969	1.01
	学業不適応の Z 得点	0.43	0.15	8.67	0.003	1.54
	友人関係不適応の Z 得点	0.87	0.17	25.20	0.000	2.39
	定数	-1.63	0.26	40.53	0.000	0.20

1 年生：- 2 対数尤度492.73 Cox & Snell $R^2=0.16$ Nagelkerke $R^2=0.24$
Hosmer と Lemeshow の検定 $p=0.14$

2 年生：- 2 対数尤度432.14 Cox & Snell $R^2=0.14$ Nagelkerke $R^2=0.20$
Hosmer と Lemeshow の検定 $p=0.16$

3 年生：- 2 対数尤度375.57 Cox & Snell $R^2=0.10$ Nagelkerke $R^2=0.16$
Hosmer と Lemeshow の検定 $p=0.11$

4 年生：- 2 対数尤度314.73 Cox & Snell $R^2=0.13$ Nagelkerke $R^2=0.19$
Hosmer と Lemeshow の検定 $p=0.18$

3-3 大学への全般的評価を規定する要因の分析

ここでは、大学への全般的評価を規定する要因を分析していく。前項と同様に、まずは性別、学年別のクロス集計を行う。ついで、評価主体である学生の側ではなく、前項とは逆に評価される側である大学の個別項目に注目していく。

(1) 性 別

大学への評価を性別にクロス集計した結果を表8に示した。性別による明瞭な違いはみられないが、男子において「とても満足」「とても不満」とする比率がわずかに高く、男子は女子に比べ大学への評価が分化する傾向にある。なお、「とても満足」と「どちらかという

表8 性別にみた大学への全般的評価

(%)

	とても満足	どちらかという と満足	どちらかという と不満	とても不満	合 計	人 数
男	9.3	56.6	26.1	8.1	100.0	571
女	6.6	60.2	28.9	4.3	100.0	1,064

 $p < .01$

と満足」,そして「どちらかという不満」と「とても不満」を統合して2分割にすると,男子で満足群65.9%,女子では66.8%となり,有意差はなくなる。

(2) 学年別

学年別にみた大学への全般的評価を表9に示した。2年生において不満傾向が強くなる傾向にある。回答を統合して2値化すると,満足群は1年生で72.1%,2年生で60.8%,3年生で66.1%,4年生で64.8%となり,1%水準で有意な差である。

表9 学年別にみた大学への全般的評価

(%)

	とても満足	どちらかという と満足	どちらかという と不満	とても不満	合 計	人 数
1年生	9.8	62.3	22.4	5.5	100.0	509
2年生	7.0	53.8	33.5	5.7	100.0	385
3年生	5.0	61.1	29.4	4.5	100.0	401
4年生	7.7	57.1	28.0	7.1	100.0	336

 $p < .01$

(3) 大学への全般的評価と個別項目との相関

表10は,大学への全般的評価と,同様に4件法でたずねた個別項目との相関係数を算出し,高い順番にソートしたものである。なお,みずほ台キャンパス固有の項目は除外してある。また,「該当しない」という回答も除外しているため,サンプル数が項目によって大きく異なることに留意されたい。『実態調査報告書』では,不満度あるいは満足度の高低を記述しているが,ここでは全般的評価との相関に注目している。

相関の高い項目をみると,「授業科目の種類(豊富さ)」「免許・資格関連科目の授業内容」「教員の学生に対する態度」「講義科目の授業内容」「オフィス・アワーの状況」と,上位5項目は授業や教員に関することであることがわかる。いずれも相関係数0.3を超えている。なお,調査票では大学への全般的評価をたずねた項目のすぐ次の設問が「授業科目の種類(豊富さ)」であり,いわゆるキャリアオーバー効果が疑われなくもないが,「免許・資格

表10 大学への全般的評価と個別項目の相関係数

	相関係数	N
授業科目の種類（豊富さ）	0.39 ***	1,613
免許・資格関連科目の授業内容	0.39 ***	1,383
教員の学生に対する態度	0.36 ***	1,605
講義科目の授業内容	0.34 ***	1,617
オフィス・アワーの状況	0.34 ***	695
学習支援室の利用しやすさ	0.34 ***	707
学生相談センターの利用のしやすさ	0.34 ***	741
キャリア支援室の支援プログラム・就職イベント	0.32 ***	870
専門演習の選考方法	0.32 ***	1,335
キャリア支援室の利用しやすさ	0.30 ***	911
履修指導・履修相談のあり方	0.29 ***	1,277
購買・売店の広さ、雰囲気、美観	0.28 ***	1,607
成績の評価結果	0.28 ***	1,607
グラウンドの使用時間	0.28 ***	209
グラウンドの使用の仕方	0.27 ***	211
事務局からのお知らせのわかりやすさ	0.27 ***	1,598
教室の数	0.27 ***	1,618
トイレの明るさ、清潔さ	0.26 ***	1,606
事務（事務局の仕事）の迅速さ	0.26 ***	1,538
トイレの数・配置	0.26 ***	1,595
教室の広さ	0.25 ***	1,623
授業の時間割の組み方	0.25 ***	1,619
海外プログラムへの支援体制	0.25 ***	453
自習室の利用のしやすさ	0.25 ***	1,074
コンピュータ室、OA演習室のパソコンの台数	0.25 ***	1,189
図書館の蔵書数や蔵書の種類	0.24 ***	1,470
図書館の設備（パソコン・ビデオ・コピー等）	0.24 ***	1,480
購買・売店の扱っている品揃え	0.24 ***	1,605
スクールバスの運行時間帯	0.24 ***	1,541
購買・売店の営業時間	0.23 ***	1,597
購買・売店の場所	0.23 ***	1,609
食堂の食事の質や量	0.22 ***	1,481
図書館の座席数・利用時間	0.22 ***	1,527
事務局窓口職員の学生に対する態度	0.22 ***	1,593
スクールバスの運転士の態度や対応	0.22 ***	1,548
食堂の雰囲気、美観、快適さ	0.22 ***	1,582
OA演習室の利用時間	0.22 ***	1,132
食堂の食事の値段	0.21 ***	1,510
エアコンなどの教室の環境	0.21 ***	1,624
サークルの部室の数	0.21 ***	1,071
サークルの部室の使いやすさ	0.21 ***	968
食堂の営業時間	0.21 ***	1,533
購買・売店の職員の態度や対応	0.21 ***	1,594
マイクなどの教室の音響	0.20 ***	1,621
英語科目の授業内容	0.20 ***	1,625
食堂の広さや座席数	0.19 ***	1,580
食堂の職員の態度や対応	0.17 ***	1,483
サークルの部室の広さ	0.17 ***	995
web上での履修登録	0.13 ***	1,627

*** $p < .001$

関連科目の授業内容」は8番目の項目であり、また7番目の項目である「英語科目の授業内容」は相関が0.20と低いことから、さほど懸念する必要はないであろう。してみると、大学の全般的評価をもっとも左右するのは、授業や教員のあり方である、ということになる。

逆に相関の低い項目をみると、「web上での履修登録」「サークルの部屋の広さ」「食堂の職員の態度や対応」「食堂の広さや座席数」といったものである。

こうした相関関係の分析は、「不満の多さ」とはまた別の角度からのものである。相関係数の高い項目は、当該項目の評価が高くなることが、全般的評価を上げることにより貢献しそうな項目である。もちろん、因果関係の向きは特定できないので、まず全般的評価があり、ついでそれが反映されやすい項目との相関が高くなる、という逆の因果関係も否定できない。しかし、相関係数が低い項目は、当該項目の改善は大学全般への評価にむすびつきにくい、逆に当該項目の低い評価は大学全般の評価を低めにくいとは言える。

もっとも、「不満が多い」とことと全般的評価との相関の高低は別のことであり、相関が低いからと言って等閑視してよいわけではない。

(4) 学生の層別にみた大学への全般的評価と個別項目との相関

前項での分析は、学生の質的違いを考慮せず、同質のものとしてなされた分析であった。しかしながら、大学進学率が上昇し、多様な学生が大学に入学している現在、学生の質的違いを前提とした分析も必要であると考ええる。

そこで、前節で作成した「学業不適応尺度」を用い、操作的な分割線をひく。ここでは、試行的に3群に分割する。まず、同尺度の4分位を作成した。これは、全体を得点順に4分に1ずつに分けるために機械的になされた操作である。この手続きで、0点から8点まで、362人(21.2%)が下位4分の1の群となった。9点から12点まで、549人(31.8%)が中の下の群となった。13点から15点まで、402人(23.6%)が中の上の群となった。16点以上394人(22.9%)が上位4分の1となった。

下位4分の1をそのまま学業への「適応群」とする。中の下の群と中の上の群を統合し「一般群」とする。上位4分の1を「不適応群」とする。より合理的な分割線を設けることが可能であればそれを用いた方がよいが、便宜的に以上の操作を行った。

まず、上記の区分ごとに大学全般への評価をクロス集計した結果を表1に示した。適応群と一般群とでは違いはないが、不適応群において不満とする学生が多いことがわかる。

ついで、学生の層別に、前項と同様、個別項目と大学への全般的評価との相関を分析していく。表12から表13までその結果を示す。煩瑣になるのを避けるため、相関係数上位10位までを示す。

表12の適応群における相関係数をみると、「グラウンド」に関する項目の相関が高くなって

表11 学生の層別にみた大学への全般的評価

	淑徳大学への全体的評価			人数
	満足	不満	合計	
適応群	68.9	31.1	100.0	347
一般群	68.2	31.8	100.0	909
不適応群	59.7	40.3	100.0	365

 $p < .01$

表12 適応群における大学への全般的評価との相関係数上位10位

	相関係数	有意水準	N
グラウンドの使用の仕方	0.45	0.018	27
グラウンドの使用時間	0.45	0.026	25
授業科目の種類（豊富さ）	0.44	0.000	347
免許・資格関連科目の授業内容	0.44	0.000	296
教員の学生に対する態度	0.41	0.000	343
オフィス・アワーの状況	0.40	0.000	147
講義科目の授業内容	0.38	0.000	345
学生相談センターの利用のしやすさ	0.37	0.000	151
履修指導・履修相談のあり方	0.37	0.000	272
授業の時間割の組み方	0.35	0.000	343

表13 一般群における大学への全般的評価との相関係数上位10位

	相関係数	有意水準	N
授業科目の種類（豊富さ）	0.36	0.000	894
免許・資格関連科目の授業内容	0.35	0.000	782
教員の学生に対する態度	0.33	0.000	901
学生相談センターの利用のしやすさ	0.31	0.000	408
学習支援室の利用しやすさ	0.31	0.000	398
キャリア支援室の支援プログラム・就職イベント	0.31	0.000	492
講義科目の授業内容	0.30	0.000	902
教室の数	0.30	0.000	900
専門演習の選考方法	0.30	0.000	747
成績の評価結果	0.30	0.000	898

いるが、集計対象者数が20数人しかおらず、参考程度とすべきであろう。これらを除くと、「授業科目の種類」「免許・資格関連科目の授業内容」「教員の学生に対する態度」「オフィス・アワーの状況」「講義科目の授業内容」といった、明らかに授業に関連する項目が並んでいる。すなわち、学業への適応群においては、大学への全般的評価と相関の高い項目は授業関

表14 不適応群における大学への全般的評価との相関係数上位10位

	相関係数	有意水準	N
キャリア支援室の支援プログラム・就職イベント	0.41	0.000	174
授業科目の種類（豊富さ）	0.41	0.000	359
キャリア支援室の利用しやすさ	0.39	0.000	185
学習支援室の利用しやすさ	0.39	0.000	167
免許・資格関連科目の授業内容	0.39	0.000	294
講義科目の授業内容	0.37	0.000	357
教員の学生に対する態度	0.36	0.000	349
専門演習の選考方法	0.36	0.000	294
オフィス・アワーの状況	0.36	0.000	154
グランドの使用の仕方	0.33	0.006	70

連項目である，ということがわかる。

表13の一般群における相関係数をみると，適応群と同じように授業関連の項目が上位にすることがわかる。しかしながら，それに加えて「学生相談センターの利用のしやすさ」が第4位，「キャリア支援室の支援プログラム・就職イベント」が第6位に入っていることが注目される。

表14の不適応群における相関係数をみると，第1位が「キャリア支援室の支援プログラム・就職イベント」となっていることが注目される。また，「キャリア支援室の利用しやすさ」が第3位であり，この層においては通常の授業関連項目のみならず，キャリア支援関連の項目が重要となっていることがわかる。参考までに，適応群における「キャリア支援室の支援プログラム・就職イベント」の相関係数は0.20，「キャリア支援室の利用しやすさ」は0.21であり，不適応群とくらべ低いものとなっている。

以上みてきたように，学生の層をわけてみると，それぞれの層によってニーズが異なりそうであることがみてとれる。今後の調査設計にあたって留意すべき点であろう。

(5) 個別項目の因子分析

ここでは，個別項目の因子分析を行う。この分析は，学生がどのような観点から大学をみているのかを明らかにする。主因子法で因子を抽出し，因子相互が直交するとは考えにくいいため，プロマックス回転を行った。その結果を表11に示し，あわせて各因子間の相関を表12に示した。解釈できるのは第6因子までである。

第1因子は，食堂と購買に関することである。すなわち，学生は，食堂と購買をひとつのこととして捉え，大学のその他のこととは別のこととして見ている，ということがわかる。

第2因子は，授業外教育プログラム因子であろう。キャリア支援室や学習支援室など，授

業外の学生支援プログラムはひとかたまりのものとして評価されている。

第3因子は図書館とOA演習室関連の因子である。情報関連施設というくくり方ができる。

第4因子は教室環境と教員の態度という因子である。教室の数、音響、広さ、そして教員の態度、成績評価、オフィス・アワーなどがひとかたまりのものとしてみなされている。なお、「講義科目の授業内容」「免許・資格関連の授業内容」がどちらもこの因子にからんでこないというのは興味深い。授業の内容と、授業が行われる環境とは別問題、として学生はみているということであろう。

第5因子は授業の入り口段階因子であろう。時間割、授業の種類、履修登録、履修指導・履修相談、専門演習の選考と、いずれも、授業内容ではなく、授業を選択する際の初期条件である。

第6因子はサークルの部室因子である。使いやすさ、広さ、部屋数が含まれている。

解釈可能な因子は以上である。第7因子以降は解釈困難であるため、通常であれば項目として削除すべきであろうが、本項の目的に照らして掲載する。「講義科目の授業内容」「免許・資格関連の授業内容」が何らかの因子を構成しないのはそれとして興味深い。また、事務局関連事項は、その他の項目と関連しない独自のものとしてみられていると解釈することもできる。

各因子間の相関をみると、相関の高いものは以下のとおりとなる。第1に、食堂・購買因子と教室環境・教員態度因子である。相関係数0.67となっている。第2に、食堂・購買因子と授業外教育プログラム因子である。0.60となっている。第3に、食堂・購買因子とサークル部室因子である。以上は相関係数が0.6以上である。

ついで、授業外教育プログラム因子と教室環境・教員態度因子、そして教室環境・教員態度因子と授業の入り口段階因子の相関も高い。ともに0.58となっている。図書館・OA演習室因子と教室環境・教員態度因子の相関も0.53と高い。

以上の分析から、いくつかの知見を導き出すことができる。授業の内容と、授業を履修する入り口段階の初期条件は別ものとみなされていることは興味深い。料理がうまいかどうかと、料理を選ぶメニューのよしあしは別のことである、と考えることもできる。また、教室環境と授業内容も別ものとしてみなされている。料理を食べる環境と料理がうまいかどうかは別である、ということであろう。「教員の学生に対する態度」が料理の環境の問題とされているのは皮肉ではある。この設問項目では教員の態度が授業時に限定されているわけではないので、様々な解釈の余地を残す。

表15 個別項目の因子分析

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
食堂の営業時間	0.99	0.09	-0.14	-0.08	-0.11	-0.05	0.06	-0.03	0.14	-0.05
食堂の食事の質や量	0.94	0.03	0.02	-0.22	0.04	-0.01	-0.05	-0.08	0.16	-0.11
購買・売店の営業時間	0.90	-0.03	0.05	-0.09	0.05	0.06	0.12	-0.05	-0.17	0.06
購買・売店の広さ、雰囲気、美観	0.89	-0.24	0.14	0.13	-0.08	-0.15	-0.04	0.27	0.04	0.00
購買・売店の扱っている品揃え	0.86	0.04	0.14	-0.04	0.06	-0.18	-0.15	0.16	-0.12	0.18
購買・売店の職員の態度や対応	0.80	0.02	-0.04	0.28	0.02	-0.24	0.19	-0.05	-0.23	-0.38
食堂の雰囲気、美観、快適さ	0.79	-0.10	-0.12	0.02	-0.18	0.17	0.18	0.07	0.11	-0.23
購買・売店の場所	0.70	0.02	-0.01	-0.13	0.17	0.21	-0.04	0.13	-0.15	-0.02
食堂の食事の値段	0.68	0.00	0.01	0.01	-0.20	0.19	0.00	0.07	0.10	-0.42
食堂の広さや座席数	0.53	-0.13	-0.01	0.01	-0.07	0.20	-0.11	0.33	0.21	0.14
食堂の職員の態度や対応	0.51	0.21	-0.01	0.33	0.04	0.06	-0.15	-0.19	-0.26	-0.41
学習支援室の利用しやすさ	-0.11	0.89	-0.04	0.14	-0.02	0.00	0.06	-0.13	0.01	0.05
キャリア支援室の利用しやすさ	-0.09	0.85	0.05	-0.09	0.03	0.00	0.06	0.16	0.17	-0.03
自習室の利用のしやすさ	-0.07	0.84	0.13	0.05	-0.07	0.08	0.07	-0.05	-0.15	-0.08
学生相談センターの利用のしやすさ	0.25	0.77	-0.23	0.08	0.10	0.12	-0.14	-0.06	-0.14	-0.05
キャリア支援室の支援プログラム・就職イベント	0.07	0.74	0.10	-0.19	0.03	-0.06	0.15	0.21	0.17	-0.09
海外プログラムへの支援体制	0.11	0.63	0.48	-0.09	0.01	-0.19	-0.02	0.11	-0.10	-0.26
図書館の設備（パソコン・ビデオ・コピー等）	0.01	0.18	0.82	-0.13	0.14	0.05	0.00	-0.17	-0.07	0.13
図書館の蔵書数や蔵書の種類	-0.07	-0.14	0.76	0.01	0.07	0.00	-0.18	0.36	0.12	-0.15
図書館の座席数・利用時間	0.08	0.03	0.73	0.09	-0.15	-0.06	0.04	-0.08	-0.13	0.12
OA演習室の利用時間	-0.02	-0.07	0.69	0.05	-0.01	0.13	0.08	0.01	0.16	-0.01
コンピュータ室、OA演習室のパソコンの台数	-0.10	0.12	0.62	0.12	0.08	0.10	0.07	-0.16	0.01	-0.05
教室の数	-0.15	-0.07	0.23	0.86	-0.15	-0.07	0.24	-0.03	0.04	-0.04
マイクなどの教室の音響	-0.03	-0.15	0.11	0.81	0.11	0.26	-0.12	0.00	-0.06	-0.11
教室の広さ	0.05	0.10	-0.07	0.72	0.02	0.01	-0.08	0.01	-0.01	0.06
エアコンなどの教室の環境	-0.08	-0.04	0.06	0.72	0.05	0.41	-0.21	0.09	-0.06	-0.04
教員の学生に対する態度	0.09	0.06	-0.09	0.60	0.02	-0.19	0.01	0.23	0.25	-0.11
成績の評価結果	-0.15	0.35	-0.25	0.56	0.22	-0.12	0.10	0.20	0.01	0.06
事務局からのお知らせのわかりやすさ	0.05	0.35	0.14	0.40	-0.17	0.03	-0.15	0.10	0.29	0.17
オフィス・アワーの状況	0.33	-0.06	0.07	0.39	0.29	-0.10	0.02	-0.11	0.20	-0.09
授業の時間割の組み方	-0.01	-0.07	-0.01	0.03	0.88	0.08	-0.15	0.09	0.06	0.12
授業科目の種類（豊富さ）	0.06	0.05	0.09	-0.06	0.73	-0.16	0.06	0.19	-0.04	0.32
web上での履修登録	-0.26	0.06	-0.01	-0.07	0.63	0.14	0.19	0.00	0.03	-0.02
履修指導・履修相談のあり方	-0.01	0.02	0.07	0.17	0.50	-0.15	0.05	0.06	0.36	-0.04
専門演習の選考方法	0.15	0.02	-0.09	0.28	0.49	0.08	0.00	-0.07	0.15	0.03
サークルの部室の使いやすさ	0.11	0.08	0.01	-0.06	0.01	0.83	0.07	-0.04	0.00	0.06
サークルの部室の広さ	-0.11	-0.08	0.10	0.15	-0.01	0.76	0.08	0.21	0.04	-0.10
サークルの部室の数	0.22	0.06	0.01	-0.09	0.09	0.68	0.12	-0.07	0.17	-0.03
スクールバスの運転士の態度や対応	0.04	0.09	-0.05	-0.17	0.07	0.00	0.82	0.00	0.24	-0.04
スクールバスの運行時間帯	-0.06	0.25	0.05	0.12	-0.12	0.09	0.53	0.27	-0.04	0.20
トイレの明るさ、清潔さ	0.21	-0.13	0.08	0.10	0.19	0.23	0.46	0.09	-0.16	-0.13
トイレの数・配置	0.20	0.07	0.00	0.11	-0.16	0.31	0.44	0.19	-0.22	0.10
免許・資格関連科目の授業内容	0.00	-0.14	0.17	0.09	0.32	0.14	0.41	-0.12	0.08	0.36
講義科目の授業内容	0.10	-0.05	-0.09	0.21	0.04	-0.20	0.27	0.65	0.25	0.16
グラウンドの使用時間	0.09	0.12	-0.06	0.01	0.06	0.26	-0.05	0.57	0.14	-0.05
グラウンドの使用の仕方	0.19	0.17	-0.10	-0.15	0.13	0.35	-0.01	0.52	0.14	-0.15
英語科目の授業内容	-0.07	-0.05	-0.04	0.00	0.15	0.06	0.10	0.38	0.70	0.07
事務（事務局の仕事）の迅速さ	0.12	0.21	0.18	0.27	-0.15	0.20	-0.01	-0.02	0.36	0.08
事務局窓口職員の学生に対する態度	0.31	0.11	0.11	0.08	0.03	0.19	0.03	-0.13	0.33	0.06
回転後の負荷量平方和	17.27	14.99	12.07	16.34	11.44	12.55	7.12	6.20	5.34	1.93

主因子法, プロマックス回転

表16 因子間の相関

因子	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1									
2	0.60								
3	0.43	0.50							
4	0.67	0.58	0.56						
5	0.47	0.47	0.49	0.58					
6	0.60	0.51	0.48	0.53	0.38				
7	0.35	0.42	0.30	0.40	0.34	0.31			
8	0.39	0.31	0.26	0.33	0.29	0.23	0.15		
9	0.24	0.36	0.39	0.33	0.28	0.26	0.11	-0.05	
10	0.27	0.19	0.08	0.22	0.03	0.13	0.15	0.11	0.02

4. まとめ

本稿では大きくふたつの分析をおこなってきた。学生生活の自己評価の分析と大学への全般的評価の分析である。このふたつを並列したのは、因果関係は特定できないが、一方の好転は他方をも好転させることが期待できそうだからである。

学生生活の自己評価の分析から、以下のような知見が導き出された。入学時点における志望順位は、いわば所与の条件であり、事後的に介入することのできない要因である。しかし、その効果は1, 2年生ではみられるものの、3年生以降はうすれていく。

サークルに加入していることの効果は、学年を統制すると明瞭とは言えなかった。かろうじて2年生でその傾向がみられた。これは、サークルに加入によってえられる機能をより詳細に分析する必要がある。友人関係の形成ということにのみ注目すれば、そのもつ効果は「学内友人関係」と同義であり、友人関係一般に解消されてしまう。しかし、サークルという機能集団への加入のもつ意義はそれだけに限定されないだろう。1年生であれば上級生からの指導や情報提供といった効能があるであろうし、2年生以降では下級生への指導という役割を与えられることによる効能も考えられる。地位と役割の獲得による集団への統合といった側面である。これに関しては、別途、より詳細な調査研究がなされるべきであろう。

学業への適応は、学年をとおして有意である。学業適応の改善は、学生生活の自己評価を改善させる方向である。

友人関係の形成は、学年をとおして安定した効果がみられる。その効果は3年次以上でより大きくなっていく傾向にある。

大学への全般的評価の分析から、いくつかの知見を導きだせた。まず、いわゆる「不満度」の高い項目と、大学への全般的評価を左右する項目は必ずしも一致しない、ということである。一例をあげれば、食堂に関する満足度は高いとはいえないが、そのことが大学への全般

的評価にあたえる影響は大きくはなさそうである。

個別項目との相関係数を検討したところ、大学への全般的評価を左右する項目は授業や教員のあり方に関するものであった。

さらに、学生を学業への適応度という観点から3つの層に分けて分析したところ、授業関連の項目はいずれの層においても安定した相関の強さがみられたが、学業不適応層において、キャリア支援にかかる項目が上位に位置するなど、学生層によってニーズが異なる様相がみてとれた。

また、因子分析の結果、授業の内容と、授業の選択にあたっての初期条件は別のこととして評価されている様相が浮かんできた。興味深い知見であるように思う。

もっとも、この分析で使用したデータは、もともとこうした分析に用いることを意図して設計されたものではないため、ある程度強引な分析とならざるをえなかった。また、そもそもの学生自身の出自の社会経済的バックグラウンドの差異にも関心が払われるべきであろう。今後、より詳細な設計にもとづいてデータ収集と分析がなされるべきであろう。

【文献】

- ・淑徳大学, 2006, 『第4回淑徳大学学生生活実態調査報告書』(第Ⅰ部 記述編)
- ・淑徳大学, 2006, 『第4回淑徳大学学生生活実態調査報告書』(第Ⅱ部 資料編)

注

- ¹ 本稿の分析は、平成18年度総合福祉学部教育改革プロジェクト委員会（磯岡哲也委員長）の一環として行われた。なお、本稿の文責はすべて筆者にある。

Research Note

How University Students Evaluate a University and their Lives?

Isao YAMAMOTO

This article has two purposes. A statistical analysis using empirical data were conducted.

It is to clarify the mechanism that a university student evaluates one's student life to the first. I used choice order in entrance to school, circle participation, studies manner, and friend relation as an independent variable. University life self evaluation as a dependent variable I did the logistic regression analysis.

I was aimed at searching for the mechanism which prescribed general evaluation to a university by a university student to the second. I calculated an individual item and a coefficient of correlation with general evaluation to a university of a university and did factor analysis of an individual item.

It is distinction, but, as for both, it is expected to be related for a general idea. It is expected that a measure to make one lets the other improve for the better.